

北海道医師会役員

退任のご挨拶

退任のご挨拶

前常任理事

渡 邊 直 樹



このたび、平成15年4月から11年3ヵ月間にわたり務めさせていただいた北海道医師会常任理事を退任することになりました。医育機関推薦者のため、当初は不慣れで戸惑いの多い日々でした。そんな中で、時間の許す限り積極的に会務に携わるとともに、常に会員のためを判断基準とすることを、自らの責務としてきました。退任にあたり、長瀬会長より精勤賞に値するとのお話をいただいたことが、何よりの勲章です。多忙な生活でしたが、素晴らしい経験をさせていただいたと思っております。

この間、學術部を担当させていただき、新医師臨床研修制度や新たな専門医制度の発足などに携わってまいりました。何とか大過なく過ごせましたのも、飯塚弘志前会長、長瀬清現会長はじめ役員の方や先生や局長以下、事務局の皆様方のおかげと感謝致しております。また、これまでの会員諸兄のご支援に対し、厚くお礼申し上げます。

北海道医師会の益々のご発展と会員の皆様のご健勝を祈念して、退任のご挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。

理事退任ご挨拶

前理事

堀 修 司



平成25年5月に2期5年間（法人法改正で1年間多い）の帯広市医師会会長を退職しました。同時に北海道医師会理事、日本医師会予備代議員を辞任することになりました。

帯広市医師会理事・役員としての約20年間は3人の会長に仕え救急・学校・総務理事らを経て、4年間の副会長の後、平成21年に会長職に就きました。平成15年から道医代議員として道医師会館に出入りさせてもらっていましたが、代議員会の席上で、真摯に医政を語る会長・副会長・常任理事の「向こう側の先生方」がとても眩しく思えました。

平成21年より道東ブロックからの理事として「向こう側」に座ることになりましたが、郡市医師会長の新米理事には驚くことばかりでした。月1回の理事会では報告事項が報告にとどまらず議論に発展し、協議事項は何時終わるのだろうか、帰りのJRの心配をするほど、真剣に話し合われました。

常任理事の先生方の滅私奉公的な月の半分以上の出張にも、道医師会にかかる熱い思いが感じられました。

年1回の持ち回り理事会は、旭川・苫小牧・北見・函館に行きましたが、昨年の函館は三男も勤務していることもあり、妻と自家用車で出かけました。1週間かけて整備した車が高速に乗ってすぐにエンストしました。代行車で函館に向かいましたが、ETC無し、ナビ無し、音楽はラジオだけの6時間は、妻との会話のみでした。あげくの果てに10年間のゴールド免許を失うスピード違反まで付きました。

日本医師会代議員として平成23年からの2年間

は、国会中継かと思う日本医師会館での会長選挙にも立ち会わせてもらいましたし、中央の先生方の「生の声」を聞きました。派閥ではなく、真に医療のための言葉が欲しいと思いました。

帯広市医師会長としての5年間は、看護専修学校校長、休日夜間急病センター理事長、帯広市生活支援会議会長、道医師国保委員など数々の役職を与えられてきましたが、全道ドクターズゴルフ帯広大会の盛況、羽生田たかし先生の参議院議員当選、道医主催講演会の援助、休日夜間急病センターへの休日出向、十勝メディカルネットワーク（通称：はれ晴れネット）の構築と無事(?)に務められたことに、医師会員の皆様に感謝申し上げます。

5年間の道医の理事としては、日医・道医の考え方を都市に伝えることしかできなかったように思いますが、医療界が抱える問題は同じです。もっと若い世代に「医政」に目を向けて欲しいと思います。

5年間の道医理事を支えてくれました、役員の皆様、職員の皆様、そして医師会員の皆様に深甚の感謝を申し上げて挨拶と致します。

退任御挨拶

前理事

飯塚 一



平成15年から旭川医科大学を代表して、飯塚前会長、長瀬現会長のもとで、計11年間、道医師会理事を務めさせていただきました。長い間ありがとうございました。事務局にも大変お世話になりました。篤く御礼申し上げます。札幌医大の渡邊常任理事同様、今回、定年で大学を去ることとなり、北海道医師会理事も退任する運びとなりました。なお、よく聞かれるのですが、飯塚前会長とは、小生は、血縁関係はありません。

渡邊常任理事は、常任理事として多くの役職をこなされておりましたが、小生は主に、理事会で検討されている課題、問題点を大学の執行部に連絡、報告するのが任務と心得ておりました。小生は、同時に、日本皮膚科学会代表の医学会評議員でもあり、同じ医師主導の会でも随分違うものだというのが実感です。2つの会を通じての感想は、社会における医師会活動の情報発信の重要性で、これからも、地道な医療活動に基づいた地域住民への啓発、ひいては行政への適切な対処が求められます。

小生もそうでしたが、大学の医師は一部の例外を

除いて、医師会活動がよく分かっていないのが実情です。この11年間、道医師会が日本医師会との連携のもと、いろいろ苦勞して、厳しい現実の中で最善をつくそうと努力していることもよく分かりましたし、関係各位の皆様の御努力、御尽力に敬服しています。同時に、日本医師会も含めての働きかけにもかかわらず、国からの外圧はどんどん強くなってきているなどというのも実感です。

旭川医科大学は、建学の理念が地域医療なのですが、大学から見ても、崩壊寸前の地域医療、新しい医療事故調査制度、患者申出療養の提示など、医療の将来に向けての重要課題、不安要素が山積しています。医師の努力がすでに限界にきているなかで、医療の現場を知らない東京を中心とする大都市の官僚機構による場当たりの対応が、特に、お年寄りの多い医療の過疎地帯を直撃しているわけで、本当に残念なことです。医療と福祉だけは、その及ぼす影響が大きいため、慎重なうえにも慎重な対応が求められるわけですが、あまりにも拙速な対処が目立ちますし、声を上げることができない弱者への視点が欠けているように感じています。特に、大学にとっては、新医師臨床研修制度が地域医療崩壊の原点になっているわけですが、厚労省の見解は若干異なるようです。このような中で、過去11年間の道医師会の活動において感銘を受けることは、どうしても札幌中心になりがちな議論のなかで、北海道の遠隔地における地域医療を忘れないでくださっていることで、本当にありがたいことと感謝しています。これからも、長瀬会長を中心に、その視点を忘れないでいただければ幸いです。

小生は学生紛争のため、昭和48年9月の北海道大学卒業で、三浦祐晶教授の皮膚科学教室に入り、翌年から米国マイアミ大学へ約4年間留学し、ついで北大に助手として戻り、4年後、大河原章教授の主宰されていた旭川医大皮膚科学教室に赴任、4年の講師を経て、2代目の教授となり、28年の教授生活を終えたこととなります。最後の7年は、副学長職も併任しており、会議の司会ばかりの毎日でした。この3月で教授職を、6月で副学長任期も終わり、大学を去ることになりました。その間、道医師会を含め、多くの方々の御支援、御厚情に支えられ、何とか職務を全うすることができました。この場をお借りして、心から御礼申し上げます。

先に述べましたように、医師会の責務は、大きな外圧の中で、これからも、益々、重要になっていくことが予想されます。最後に、長瀬会長を中心に、北海道医師会の今後の益々の御発展を心からお祈りして、退任の御挨拶とさせていただきます。